

台湾に対する日本の大学生の認識の変化 —台湾の小学生と直接交流をした大学生のアンケート調査を通して—

Changing Perceptions of Taiwan among Japanese University Students
—Through a Survey of University Students Who Have Direct Interactions with Taiwanese Elementary School Students—

清水 和 久 (人間科学部こども学科教授)

Kazuhisa SHIMIZU (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

筆者はこれまで国際協働学習を日本と台湾の小学校の交流をオンラインで支援するという形で行って来た。その交流は、小学校では時間の制約もあり、自国文化の発信に力を入れることになり、相手文化を調べたりするところまでは行きつかないことが多い。また、オンライン上のzoom等での話し合いは日本のアニメの話になることが多く、台湾の文化の話題になることは少ない。

そこで台湾のこども達が大学に来訪する機会をとらえて、台湾に関することをメインとした交流を行おうと考えた。実際に台湾の校長先生から、台湾の英語教育やバイリンガル教育の現状の講義を受けるとともに、台湾の児童との直接交流を通して、その英語教育の成果を知ることができた。学生にとって日本以外の教育システムを知る良い機会となり、こどもは国籍が違っても本質的に変わらないことを知ることができた。

〈キーワード〉

国際交流 台湾に対する大学生の認識 台湾のバイリンガル初等教育

1. はじめに

筆者はこれまで台湾の小学校と日本の小学校間の国際協働学習支援を行って来た。2006年からは、協同で壁画を描くアートマイルプロジェクト⁽¹⁾に参加、2015年からは、ぬいぐるみを交換留学生として送りあうJEARNのティベアプロジェクト(TBP)⁽²⁾を行って来た。日本の小学生が台湾の小学生と交流し、台湾のことを知る中で、台湾で行われている教育の認識が自分にとって変わってきたように思う。2006年から参加しているアートマイルプロジェクトでは、様々な外国の小学校と協働で壁画を描いてきた。外国の交流相手国を選ぶ場合には、アジア諸国よりも、英語の練習になるアメリカなどの国を希望する小学校が多かった。

TBPに活動の場を変えた後は、当初はiEARN⁽³⁾で知り合ったいろいろな国とTBPを行っていたが、時差が少なくzoom等での交流も可能な台湾を交流相手として固定して行くようになった。郵送費代も安く、3日ほどで荷物を送れるのでとても交流しやすかった。

国際協働学習は英語を実際に使う場面として期待する面も多いが、台湾は小学校からの英語の学習を日本より10年以上も早くスタートさせており、日本が英語の教科化を進める前は、台湾の6年生で扱う英語の内容は、日本の中学校2年ぐらいの内容であったと記憶している。

台湾は、2030年度までに、英語を第2の共通語とするバイリンガル国家を目指しており、交流を重ねるたびに台湾の児童の英語の上手さを感じる事となった。また、ICTの教室への導入も、早くから教室に天吊り用のプロジェクターを配置し、ICTを活用していた。また、一部の小学校ではあるがVRゴーグルも積極的に授業に取り入れていた(2022年12月の台湾訪問時)。

日本のような全児童・生徒に1人1台の端末の配布は台湾ではまだであるが、英語専科での授業の開始や教室1台のプロジェクターの活用においては日本よりもスタートが早かった。

このように台湾のイメージは違い、教育の分野においても日本よりも進んだ面がいくつも見られた。私はゼミの学

生とは国際協働学習の支援で毎年台湾の小学校を訪問して現場を見てきているので、より多くの本校の大学生に台湾の進んだ教育技術を伝え、台湾の児童と交流の機会を広めたいと考えていた。

2. 研究の方法

- (1) 台湾に対する国民及び大学生の印象
- (2) 筆者の台湾との国際交流の経緯
- (3) 台湾の小学生と本学の学生との交流実践
- (4) 大学生に対するアンケート調査

3. 研究の内容

3-1 台湾に対する国民及び大学生の印象

近年石川県を訪問する外国人のなかでも台湾からくる観光客が首位を占めている。⁽⁴⁾

日本人が最も親しみを感じるアジアの国・地域では台湾が46%で1位であり2位の韓国（約19%）、3位のシンガポール（約9%）などに大差をつけている。また、日本人の76.6%が台湾に親しみを感じている、その理由としては、「台湾人が親切で友好的（最多回答）、歴史的に交流が長い、経済的な結びつき」などがあげられている。

また、台湾の日本に対する印象は、2024年度対日世論調査（サンプル数1520名 by公益財団法人日本台湾交流協会2025年3月31日）⁽⁵⁾によると、日本に親しみを感じると答えた人が全体の81%であり、イメージとしては「自然が美しい62%」、「豊かな伝統と文化を持っている59%」、「決まりを守る56%」、「経済力技術力が高い42%」となっている。日本と台湾の間の良好な関係が推測される。

今回、台湾の小学生と3年次生の直接交流を行うにあたり、台湾のイメージについてまだ何も予備知識のない筆者の国際教育の授業を受講している1年人生51人に台湾に対するイメージを自由記述で書いてもらった。

その結果は、台湾に対して肯定的印象60%、中立・混合印象25%、否定的印象15%となった。以下がその内容である。

表1 好意的・親しみを感じる自由記述内容（60%）

	項目	代表的な記述
1	親日・友好国	「日本と仲が良い」「災害支援してくれる」「日本好きな人が多い」
2	食文化の魅力	「ご飯が美味しい」「タピオカ」「台湾カステラ」「屋台が多い」
3	観光地としての魅力	「温泉」「旅行先として人気」「アニメ『千と千尋の神隠しの舞台』の地」
4	人柄・雰囲気	「フレンドリー」「明るい感じ」「日本と価値観が近い」

表2 中立的・混合的印象の自由記述内容（25%）

	項目	代表的な記述
1	文化的雑多さ	「ごちゃごちゃしてそう」「赤色」「バイクが多い」
2	発展度の疑問	「発展途上国っぽい」「教育に乏しい」「遅れているイメージ」
3	政治的背景	「中国と揉めている」「中国にちょっかいをかけられている」

表3 否定的印象の自由記述内容（15%）

	項目	代表的な記述
1	治安や衛生面	「治安が悪そう」「人が多すぎる」
2	人柄への疑念	「人柄が悪い」「価値観が合わない」
3	政治的不安	「政治が過激」「中国の影響が強い」

大学生の認識は、おおむね国民の認識と合致していると思われる。親日的である点、観光地や食べ物などは台湾の人気の理由であると思われる。一部台湾に関する情報不足により発展途上のイメージや治安が悪いなどという誤ったイメージもあるようである。政治的不安に関してはマスコミからの情報の影響も大きい。これらの印象を踏まえたうえで、台湾の教育について焦点化し、今回の直接交流を行い、学生の印象の変容に迫りたいと思った。

3-2 筆者の台湾との国際交流の経緯

筆者が現在専門としている国際理解教育に興味を持ったのは、小学校教員の職にあった1990年後半からである。1997年にアメリカのAT&Tが行っていた「バーチャルクラスルームコンテスト（VCコンテスト）」という国をまたいで共同でWEBサイトを作るという競技に参加（1997-2000）し、台湾の先生と一緒にグループでチームを作り4年間活動をおこなった。それが縁で、台湾の国について興味を持ち、実際に台湾の先生の小学校へ家族で訪問を行っている。当時の台湾の教育の印象は、一斉学習で講義的な印象が強かったことを覚えている。その後大学教員になった後も2国間で壁画を描く、アートマイルプロジェクトに参加（2006-2016）、ここでも台湾の小学校と石川県の小学校と共同で壁画を作成するプロジェクトへの支援をおこなった。その後相手国を台湾だけに絞り、ぬいぐるみを留学生として交換するテディベアプロジェクト（TBP）（2017-2025）をおこなっており、現在に至る。

筆者が台湾の小学校との交流支援を始めて以来、毎年のように台湾の嘉義市の文雅小学校は十数名の小学生を引率して交流のある金沢の小学校を訪問してきている。また、交流に参加していた台北市の日新小学校も複数回金沢の小学校に来ており、近年では平成5年度に嘉義市の文雅小に加えて、同市の宣信小学校がTBPで交流している四十万

小学校へ、平成6年には台北市の五常小学校がTBPで交流していた小立野小学校へ訪問している。日本から、小学生を連れて台湾に行くことは非常に困難であるが、台湾では小学校単位で地方自治体に助成金を申請してアプローチしているようである。このことから、行政が積極的に外国へ行くことを奨励しているようである。

3-3 台湾の小学生と本学の学生との交流実践

今回、台湾の五常（ウーチャン）小学校が金沢市内の小学校を訪れる計画があり、この機会を利用して、大学にも訪問してもらうことにした。台湾の小学生と大学生との直接交流が実現することになる。訪問時に、同時に同行される校長先生に台湾の教育についての講義もお願いできることとなった。

大学側は3年次研修として実行し、ねらいとしては、今後、小学校や幼稚園・保育園でも外国籍の児童が増えることが見込まれるので、今回の機会を外国の児童と交流の体験の機会とした。なかなか大学生が、直接外国の児童とかわる機会は少ないのでその好機ととらえた。さらに交流内容を決めていく中で、企画する実行委員の学生が台湾のことを調べて、クイズ形式で参加学生にプレゼンすることとした。

筆者がこれまで台湾の小学生とのオンライン国際交流での交流では、途中でWEB会議を組み込むのではあるが、その内容は日本からの発信としてアニメや文化のことが中心で、なかなか相手国の文化や食べ物話題まで触れられないことが多い。これは、言語上の問題や準備に時間がかかけられない事にも起因すると思われる。今回大学生が交流することもあり、上記の語学や時間の問題は解消できると思い、学生には事前に台湾のことを調べてもらい、クイズ形式でプレゼンを行ってもらうこととした。こうすれば台湾の児童の満足度も高いと考えた。

プレゼンの内容や、台湾の児童に対する応答は学生自身に考えてもらったこととした。以下日程である。

表4 五常小の星稜大訪問の研修日程

実施日：2025年6月5日(木)10時から14時
場 所：金沢星稜大学
訪問者：台北市立五常小学校（教師3名、児童17名）
内 容：
学科長あいさつ
1) 台湾の教育についての講話（五常小の校長）
2) 台湾の紹介プレゼン（五常小の児童）
3) 台湾紹介のクイズとプレゼン（星稜大生）
4) 星稜大学ウォークラリー（星稜大生）
5) 合同昼食会
記念撮影 見送り

3-3-1 台湾の教育についての講話

以下五常小TSAO校長の講話の概要である。

五常小学校は、2013年からバイリンガル教育を1年生からスタートしており、バイリンガル教育について3回の受賞歴がある。

外国語を取り入れた以下の4つの授業指導モデルを実施している（表5参照）。

表5 バイリンガル教育の4つの授業パターン

- ① 「外国人教師との協同授業」
日本でいう担任と英語教師のTTの授業
- ② 「一般教科教師によるバイリンガル教育」
普通の授業の中に日常的に英語を取り入れた教育
- ③ 「認定教師による専門的授業（B2レベル英語）」
外国人講師などを採用しておこなう授業
- ④ 英語で進められる体育、図工、音楽の授業特に教師の指示を英語で『聞くこと』を中心としたTPR (Total Physical Response) 法や、CLIL (内容を学ぶ手段として外国を使用する) の方法。

これらの授業は、カリキュラムの中に位置づけられており、週に6時間から8時間、下記の内容で行われている。主にバイリンガル図工、バイリンガル音楽、バイリンガル保健体育、バイリンガル生活などの教科があり、それ以外に五常ワンダーランドといった日本の総合の学習の時間にあたるものが2時間ある。低、中学年は週8時間、高学年は週6時間のバイリンガル教科がある。なお、中学年は週1時間、高学年は週2時間の英語の時間もこの中に含まれる。日本に比べて学校で英語に接する時間がかなり多い。

Wuchang Bilingual Elementary School			
Bilingual Subjects (times per week)			
Bilingual Subjects:	Lower grade	Middle grade	High grade
1. Bilingual Art	Bilingual Life Course (3)	Bilingual Music (1)	*
2. Bilingual Music	Bilingual Health (1)	Bilingual Art (2)	Bilingual Art (2)
3. Bilingual Health & PE	Bilingual PE (2)	Bilingual Health (1)	*
4. Bilingual Life Course	English (1)	Bilingual PE (1)	Bilingual PE (1)
Bilingual thematic course (course name: Wuchang Wonderland)	Wuchang Wonderland (2)	English (2)	English (2)
毎週	8 classes/week	Wuchang Wonderland (2)	Wuchang Wonderland (1)
		8 classes/week	6 classes/week
English	Homeroom teachers: 班級經營課室用語 (Encourage homeroom teachers to use classroom English)		

図1 学年別バイリンガル教科の時数（校長提供スライド）

筆者は、この五常小学校に過去3回訪問しており、バイリンガル図工を参観したことがある。図工の先生が正月飾りの作成方法を指導している場面であったが、図工などでは作業中心なので、英語での指示が十分理解できなくても実施できると思えた。

上記のバイリンガル教育の他に、国際、地域、環境についての紹介もあった。

表6 国際・地域・環境教育の取り組み

- ① 五常小ライフマップ
地域の交通・ランドマークなどを英語で学習し、訪問客に対して児童による英語での地域紹介活動。
- ② 国際交流
日本・台湾の学校とのオンライン共同授業。
- ③ 環境教育
緑のキャンパスでの生態系学習として、気候変動、虫の生態、地元野菜の活用などをテーマに活動。
- ④ 文化交流と課外活動
横浜市との音楽交流コンサートや、バイリンガルでの祭りの実施



図2 五常小生活マップの提示（校長提供スライド）



図3 国際交流TBPの図（校長提供のスライド）

特に日本の小学校と行っているTBPもカリキュラムの中にしっかりと位置づけされており、日本との英語での交流が重視されていることがわかる。

台湾は、20230年にバイリンガル国家になることを目指しており、英語教育に大変力を入れていることが講演より理解することができた。

3-3-2 台湾の小学生による台湾紹介プレゼン

校長先生はすべて英語で話されたので、学生にとっては少しハードルが高かったようである、しかし、それに続く小学生のクイズもすべて英語でなされた。内容的には台湾の食べ物の紹介として「フルーツ、パイナップルケーキ、オイスターオムレツ、小籠包」市内の交通手段として、「大渋滞のバイク、日本から輸入された新幹線、地下鉄のMRT」の紹介があった。最後に学校の時間割の紹介があ

り、1限40分で、7限までであること」が紹介された。その後で時間割のクイズなどがあった。



図4 バイク通勤の様子（児童のスライドより転載）

このバイク通勤の様子は、日本の学生に衝撃を与えた。さらに加え、児童の英語を使った堂々としたプレゼン姿勢にも大変驚かされた。

3-3-3 大学生による台湾クイズプレゼン

ゼミごとに大学生が台湾について調べたことを全体場で紹介した。クイズに答えるのは、他のゼミの学生であり、台湾の児童も答える形で実行された。台湾のことを事前に調査した大学生が出題するので、台湾の児童でも知らない問題もあったりしたので、台湾の児童も大変興味深く聞いてくれた。台湾の児童にとっても、自国のことを外国人が調べて、クイズに出してくれているので、とても楽しんでいただようである。今回のねらいの1つである台湾の話題を扱うことで台湾の児童を喜ばせることにつながった。



図5 大学生のクイズに答える台湾の児童

3-3-4 大学生による校内ウォークラリー

話が続いた後、学内をまわって体を動かすウォークラリーを実施。6つのグループに分かれた台湾の児童を学生がガイドしながら、4つのコーナー（紙風船バレー、紙飛行機とばし、ARモーションゲーム、自作ピンボールゲーム）でゲームを体験してもらう企画である。大学生は、ガイド役とコーナー役に分かれ、ガイド役は校内の案内を英語で

し、コーナー役はコーナーで行うゲームのルールを英語で説明することで、台湾の児童に楽しんでもらった。



図6 星稜大学ウォークラリーでARゲームを楽しむ児童

3-3-5 交流昼食会

昼食は、分かれた6つのグループで学生と台湾の児童（各グループ3人程度）と一緒に昼食をとりながら話せる時間とした。

3-4 アンケート結果（3年次生）と考察

イベント実施後3年生にアンケートを行った。以下がその内容であり、それぞれの結果を分析する。

表7 交流を行った3年生へのアンケートの項目 N=60

- 1) 台湾の教育についての校長先生の話の感想
- 2) 台湾の児童のプレゼンを聞いての感想
- 3) ウォークラリーの感想
- 4) ランチタイムでの交流
- 5) 交流全体を通しての感想

3-4-1 台湾の教育についての校長先生の話の感想

校長先生の台湾の教育に対する話の理解度について6件法で尋ね、その理由を自由記述で記載してもらった。

表8 校長先生のプレゼンに対する理解度

	項目	割合
1	とてもよく理解できた	3.4%
2	理解できた	29.3%
3	どちらかという理解できた	37.9%
4	どちらかという理解できなかった	25.9%
5	あまりわからなかった	3.4%

台湾の教育に関する理解度は、すべて英語で話してもらったこともあるが「どちらかという理解できた」も含めて70%である。以下その内容について言及する。全体的に教育制度やバイリンガル教育についてよく理解できており、日本との違いや共通点を具体的に比較できている。ま

た、台湾の英語教育の工夫や特徴を理解し、評価できている。以下学生の典型的な感想を記載する。

① 台湾の英語教育の特徴およびその評価について

- ・「図工の授業を英語で行なっていた動画が印象に残った。そのようなバイリンガル教育によって、日常的に英語を聞いているからこそ、児童たちの英語の発音が綺麗なのかなと思った。」
- ・「英語を第二言語にするために、グローバル教育として美術や体育などの教科を学んでいて、とても充実した教育が行われていると思った。」

② 日本の教育との比較・改善点への内容

- ・「日本でも英語教育が低年齢化しているが、たくさんのかを学べる幼少期に英語をもっと取り入れていくべきなのではと感じた。」「日本も、小学生からの英語教育に力を入れるべきだと感じた。」等、教育者の立場になるという観点での意見も多かった。
- ・「日本の学校と違い、英語の授業を受けるのではなく、英語で様々な授業を受けることで、実践的な会話や英語力が身につくと思った。」といったような英語の実践力をつける英語教育の必要性につながる意見もあった。

③ バイリンガル教育の特徴について

- ・「バイリンガル教育が進んでいて、英語と中国語の使い分けをしながら授業をしているのがすごいと思った。」
- ・「バイリンガル教育に力を入れていることがわかった。日本の学校と違い、英語の授業を受けるのではなく、英語で様々な授業を受けることで、実践的な会話や英語力が身につくと思った。」等の意見が出された。

一方どちらかという理解できなかったグループは、全体的に校長先生の英語の説明が難しく、話の内容を十分に理解できなかったようではあるが、キーワードや写真を頼りに、部分的には理解できたようである。感想をいくつか転載しておく。なお、プレゼンの簡易的日本語訳は事前には、配布しておいた。

- ・「日本の小学校よりも授業の中で英語を使う機会が多いことがわかった。」「バイリンガル教育は教師の語学力も高くないとできないのですごくいいと思いました。」「子どもに教える立場である校長先生自身が、英語が堪能でいらっしゃるがまずはずごいなと思った。」「台湾の教育で驚きだったのは、国際教育が進んでいることであつた。」

以上、台湾の教育に関する内容を3つに分類し、学生の理解度を整理した。特に「バイリンガル教育の特徴」に関心を持った学生が多く、日本との違いを認識しながら、日

本の英語教育の改善点を述べる意見も見られた。一方で、校長先生の英語のプレゼンが難しく、十分に理解できなかった学生も一定数おり、言語の壁が課題として浮かび上がっている。しかし、普通の小学校の校長先生が英語でプレゼンすること自体が大学生には新鮮な驚きであったようである。台湾の場合は校長先生の学歴としては修士が多く、英語もその素養として必要であると思われる。

3-4-2 台湾児童のプレゼンに対する学生の理解度

台湾の児童が英語で行ったプレゼンに対する学生の理解度は、校長先生の英語の話よりは高く、十分理解できているように思われる。

表9 台湾児童のプレゼンに対する学生の理解度

	項目	割合
1	とてもよく理解できた	53.6%
2	だいたい理解できた	41.1%
3	どちらかというと理解できた	5.4%
4	理解できなかった	0%

また、内容に関する感想を自由記述で記載してもらい、分類を行った。分類ごとの具体的な分析と学生の代表的な記述を記載する。

表10 台湾の児童のプレゼンに対する内容理解の割合

	項目	割合
1	プレゼン内容・準備に対する評価	約30%
2	子どもたちの英語力への驚き・評価	約35%
3	台湾の文化・学校生活に対する学び	約20%
4	プレゼンの工夫・楽しさ	約15%

① プレゼン内容・準備に対する評価（約30%）

入念に準備がしてあり、台湾の児童のスライドや写真が見やすく、わかりやすかったという意見が多かった。

該当する学生の感想:「台湾についての有名なことや学校のスケジュールなどをきれいにまとめてくれていてすごくわかりやすかった。」「スライドはもちろん、こどもたちの英語の発音が綺麗だった。」「見やすいスライドとわかりやすい説明（簡潔な説明）で、全て英語を理解して聞き取れなくても、分かる問題設定でとても楽しめた。」

② 子どもたちの英語力への驚き・評価（約35%）

英語が大変流暢で、発音が綺麗だった。堂々と話しており日本の小学生と比べてレベルが高い。台湾の英語教育の成果を見る思いであった。

該当する学生の感想:「全員が英語を話し、その英語も

流暢で驚いた。」「英語の発音が自分よりもすごくてびっくりした。」「大学生である私よりもペラペラと英語が話せるのは、英語教育に力を入れている成果なのかなと感じた。」

③ 台湾の文化・学校生活についての学び（約20%）

台湾の学校制度や文化について、日本と比較しながら述べている感想が多かった。また、台湾の食べ物や交通事情について興味を持ったという意見も多い。

該当する感想:「小学校でも学生証を携帯していたり、売店があったりなど日本ではあまり見受けられない情報が紹介されて、聞いていて面白かった。」「台湾の学校の時間割や公共交通機関などについて、日本と比較しながら聞くことが出来た。」「食生活や交通手段など、日本と違うところが多々あると感じた。」

④ プレゼンの工夫・楽しさ（約15%）

一方的なプレゼンだけでなく、後半には理解度試すクイズもあり、正解者には景品を出すなどの工夫がされていた。発表も堂々としており、双方向性を重視したプレゼンになっていた。学生にも十分参考になるものであった。

該当する感想:「途中でクイズもあり、楽しく台湾について知ることができた。」「児童たちが景品を用意していて、楽しんでもらおうと考えてくれていたことが嬉しかった。」「初対面の大学生に向かってプレゼンするのはとても緊張することだと思うけれど、子どもたちみんながそれぞれの担当について一生懸命英語で話していてすごいと思った。」

まとめ

特に「英語力の高さ」に驚いたという感想が多く、台湾の英語教育の影響を強く感じたことがわかる。実は台湾の児童は、大学を訪問する前には、金沢市内の小学校を2校訪問しており、その時も日本の小学生相手に台湾紹介のプレゼンをしている。しかし、大勢の日本の大学生のまえで堂々とする姿は、場慣れした感じがおり、英語の発音も流暢であった。

また、プレゼンの見せ方の工夫やクイズの正解者に景品を出すなど、台湾との文化の違いについても興味を持った大学生が多く、異文化と触れ合うことの面白さを体験できようと思う。

3-4-3 ウォークラリーの感想

大学生の主催する校内ウォークラリーでは、学生は2つに別れ、台湾の児童と一緒に回るグループと、コーナーで待っていてゲームを行うグループに分かれた。アンケートは2つの役割にわけて分類した。

○ 児童を連れて一緒に回る学生の感想

一緒に回る役の学生は、校内の説明などその場に応じて対話するアドリブ力が求められる役割となる。

表11 台湾の児童と一緒に回る役の学生の感想

	項目	割合
1	児童の反応・楽しさに関する体験	約35%
2	言語の壁・コミュニケーションの難しさ	約40%
3	身振り・ジェスチャーを活用した交流	約15%
4	児童の様子・緊張や戸惑い	約10%

① 児童との交流の楽しさ・成功体験（約35%）

「緊張しているのが感じられたが、ゲームで協力したり、ハイタッチしたりできて、楽しかった。」「小学生とたくさんコミュニケーションを取ることができて嬉しかった。」

② 言語の壁・コミュニケーションの難しさ（約40%）

「いざとなったとき、単語や熟語でしか英語を話せなかったため、うまく会話ができなかったのが悔しかった。」「英語で話そうと思えばなんとかなる、全然話しかけられなかったの、ジェスチャーを多くすることを心がけたことで、話しかけることができた。」

③ 身振り・ジェスチャーを活用した交流（約15%）

「単語だけでも言うことで子どもたちも理解しようとしてくれてたくさん聞き返してくれて嬉しかった。」「笑顔や動きなど英語以外で乗り切れました！！」

⑤ 児童の様子・緊張や戸惑い（約10%）

「小学生も英語をあまり話せない状況であり、さらにとっても恥ずかしがりやの児童だったので難しさを感じた。」

○ コーナーで待ち受ける学生の感想の記述

表12 コーナーの学生の感想

	項目	割合
1	児童の反応・楽しさに関する評価	約30%
2	言語の壁・コミュニケーションの難しさ	約40%
3	身振り・ジェスチャーを活用した	約20%
4	児童の様子・緊張や戸惑い	約10%

① 児童の反応・楽しさに関する評価（約30%）

「ARのブースを行って、小学生の子が楽しそうにやっていたのでよかった。」「日本の伝統遊びを一生懸命理解しようとしてくれて、楽しんでもくれたのが嬉しかった。」

② 言語の壁・コミュニケーションの難しさ（約40%）

「ゲームルールを英語で説明するのが難しかった。実際にお手本を見せてもなかなか理解してもらえない」「説明を英語ですることの難しさを感じた。」

③ 身振りを活用したコミュニケーション（約20%）

「言葉が出てこなくても、なんとなく伝わってくれてよかった。」「英文になってなくても身振りでコミュニケーションができたと感じた。」

④ 児童の様子・緊張や戸惑い（約10%）

「知らない大学生に囲まれて恥ずかしそう？不安そう？な子どもたちだったが、交流が進むうちに笑顔が見られた。」「紙飛行機競争のコーナーに助っ人として参加したが、学生たちが台湾の小学生たちにもわかるよう英語やジェスチャーで説明していたのがすごく良かったと思う。」

「児童をガイドする側」と「コーナーで待ち受ける側」との学生の感想の違いを分析してみると、前者が、同一の児童との交流の時間が長いので、コミュニケーションに関わる楽しさの感想の割合が増えている。後者の学生はルールの英語での説明が必要なため、意思相通に関する感想が多い。プレゼンの時と比べ、よりパーソナルなコミュニケーションが求められる時間となったので、コミュニケーションができた時の満足度も高いと思われる。

3-4-4 ランチタイムでの交流

表13 台湾の児童と交流できたと感じた割合

	項目	割合
1	とても交流できた	15.8%
2	交流できた	35.1%
3	どちらかというと交流できた	29.8%
4	あまり交流ができなかった	15.8%
5	全然できなかった	3.5%

ランチタイムは、グループごとに昼食を食べながら、ゼミごとに自由に台湾の児童と過ごす時間である。約80%の学生が交流できたという肯定的な評価をしている。

以下自由記述から交流の満足度別感想を記載する。

① 交流ができたと考える学生（約50%）

小学生が積極的に話してくれたグループも多く、わからない言葉は、児童が持っているiPadを使って翻訳機を使いながら交流をおこなったところもあった。また話した共通のテーマとしては「食べ物、ポケモン、ディズニー映画など」などがあつた。

該当する学生の感想:「好きなディズニー映画の話をした。日本でも台湾でも人気なディズニーキャラクターは共通だなと思うと、嬉しかったし、親近感を持った。」「台湾語や中国語での『食事をする』という言葉を教えてもらうことができたり、どんなスポーツやどんなものが好きなのかをきくことができたりした。」「梅干しが酸っぱすぎて大ウケしてた。』

② どちらかという与交流できたと考える学生(約30%)

交流はできたが、小学生が恥ずかしがって、話す人が固定されていた。簡単な質問(年齢、好きな食べ物など)をすることで交流できが、話がすすまなかったようである。

該当する感想:「とてもシャイで、話しかけても元気がないように思った。けど、寿司が好きな話をしてくれて嬉しかった。」「翻訳機を使って簡単な中国語を教えて欲しいと聞くと、方言も一緒に同じ言葉でも3通りほど教えてくれて、初めて聞く言葉だったのですごく新鮮でよかった。」「『おなか空いてる?』『おにぎり知ってる?』といった簡単な会話しか出来なかった。』

③ 交流が難しかったと考える学生(約20%)

言語の壁を強く感じた。小学生が恥ずかしがっていたり、席が遠かったりしたため交流が難しかった。話しかけても反応が薄かった。

該当する感想:

「児童達に『これは○○だよ』と話しても、分からず、反応に困ったような顔をする児童が多かった。」「英語ができる人に会話を託してしまった。」「あまり会話できなかったのも、もっと話しかけたら良かったと思った。』

3-4-5 交流全体に対する学生の感想

「台湾の児童と交流をしてみて感じたこと」という題で自由記述で記載してもらい、内容によって筆者が4つに分類して分析した(表14参照)。

表14 交流の学生の全体的な感想

	分類カテゴリ	内容の概要	割合
1	言語の壁と英語力への気づき	英語での意思疎通の難しさ、英語力不足の実感、学習意欲の向上など	46.7%
2	文化・価値観の共通性の発見	国籍が違っても子どもは同じ、笑顔や遊びで通じ合える、共通の楽しさの発見など	28.3%
3	教育・保育への応用意識	保育現場での言語対応、異文化理解の重要性、教育現場への応用意識	15.0%
4	台湾への興味・親近感の芽生え	台湾を身近に感じた、もっと知りたい、実際に行ってみたいという関心の高まり	10.0%

まず、一番多かったのが、「英語で伝える難しさ」や「もっと英語を学びたい」という感想である。「英語が苦手なため、コミュニケーションが取れるか不安だったが、交流

をしていくなかで台湾の子たちの笑顔が見れて楽しめたのかな?と嬉しく感じた。」「や「英語を活用して会話するというのは大学生になってはじめてだった。自分の英語能力の低さに改めて実感して英語の学習の必要性を感じた。』という感想に代表されるように、台湾の児童の英語力を知って、自分の英語力の向上の必要性を感じる学生が多かったようである。

次に「文化・価値観の共通性の発見」(28.3%)の観点では、「子どもはどこでも同じ」「笑顔やジェスチャーで通じ合える」といった感想が多く見られた。初めは外国人のこどもということで、身構える学生も多かったが、国籍が違っててもこどもは変わらないというように、日ごろからこどもとバイトなどで接している学生にとっては新たな発見があったようである。「国は関係なく、人と仲良くなれることがわかった。』という言葉に代表されるように、こどもという観点で見ていることがわかる。

3番目の「教育・保育への応用」という観点(15%)では、将来の保育士・教員としての視点から「異文化対応力」や「言語支援の必要性」に言及する声が目立った。

学生の「異文化理解や言語支援の重要性を改めて感じた。教育現場での対応力を高める必要があると実感した。』という感想に代表されるように、日本語によるコミュニケーションが難しい事例が増えている教育現場で、それに対応する力が必要とされている意識を持った学生も多いことがわかる。

最後に「台湾への興味・親近感の芽生え」(10.0%)という観点では、交流を通じて台湾への関心が高まったことになる。近年、日本人の台湾への関心は高まっており、こどもたちに影響力を持つことになる保育士や教員を志望する学生においては、近い国である台湾に興味を持ってもらうことは重要である。

4. 研究の考察とまとめ

今回、はじめて教員を目指す多くの学生に台湾の児童との直接交流の機会を提供することができた。今回の交流のねらいは、大学生に外国(台湾)の教育事情を知ってほしい事、またその成果である児童の姿を直接見て、その教育制度の成果を確かめて欲しい事の2点であった。近年台湾の地政学上の危険性の話題がニュースに流れることも多い。しかし、より多くの人が近隣の国の立場に関心を持つことは戦争などの危険性を回避することになると思われる。

教員を目指す学生が、日本の教育制度を考える上で、比較する他国の教育制度を知ることは重要である。

例えば、英語教育で考えると、英語を母国語とせず、日常的に英語が話されない国(ESL)としての立ち位置は日

本と台湾は同じである。しかし、台湾は2030年にシンガポールのようなバイリンガル国家を目指しており、台湾のバイリンガル教育は、小学校で週6時間から8時間も行われており、その本気度がわかる。英語に関する政策は日本にも大変参考になる動きである。これらの話を直接台湾の現場の校長先生から英語で聞いた意義は大きいと考える。

次に、台湾のこどもたちと直接会うことができ、交流できた点である。台湾の英語教育の成果を感じることができたと同時に、国が違ってもこどもの本質は変わらないことを直接体験することができたはずである。大学生は今後さ

まざまな国籍を持った子供たちがいる教育現場に入ることになるので、その時の対応方法を考える機会になったと思われる。

最後にこれまで日本と台湾の小学校の交流支援を行ってきて、交流の話題がいつも日本のアニメなどの話題になっていたので、大学生が行う交流は自国の日本文化紹介ではなく、ぜひ相手（台湾）をテーマにした話題で行いたかった。台湾の児童の反応を見ると自国の文化を取り上げてもらう喜びを感じていたように思う。相手の文化に尊敬を払い、交流することの大切さを感じた交流となった。

注

- (1) Japan artmile <https://artmile.jp/>
- (2) <https://www.jearn.jp/Study/project.html>
- (3) <https://www.iearn.org/>
- (4) 統計から見た石川県の観光（令和5年）

- 石川県観光戦略推進部
- (5) 台北駐日経済文化代表処（台湾の在日大使館に相当）
<https://www.yourator.co/articles/847Styly1>

